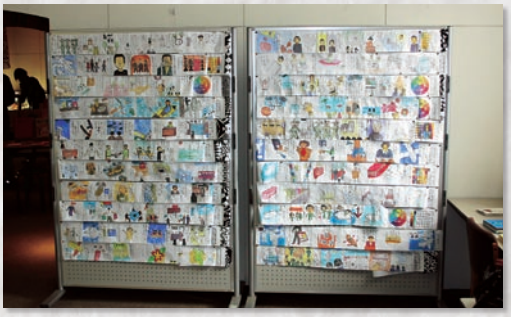
奈良教育大学広報誌

Nara University of Education
January 2007

ぎょうせい



1
2007

ならやま 2007年1月号

CONTENTS

3 【学長コラム】

地域連携、国際交流 学長 柳澤 保徳

4 **教員養成GP 2年連続採択！「高大融合による理数科高校教員養成」**
融合理数GP プロジェクト代表 松山 豊樹

6 **ニィハオからツァイチェンまで―国際大学交流セミナーを終えて―**
副学長（国際交流・地域連携担当） 淡野 明彦

8 【ラボ・レター】

日本語の多様性と普遍性の探求 国語教育講座・助教授 前田 広幸

立場は変わっても 数学教育講座・教授 吉田 明史

健やかな食生活を送っていますか? 生活科学教育講座・教授 大家千恵子

学校における豊かな人間関係の構築を求めて
教育実践総合センター・助教授 池島 徳大

10 【ひと・あれ・これ】

「人」の「事」を思う仕事に就いて ナカバヤシ株式会社・人事部 石田 智也

子どもと同じ目線で向き合って 十津川村立平谷小学校・教諭 山本 菜採

11 学生企画活動支援事業 **第2回京終ビバ**
京終ビバ代表 総合教育課程環境教育コース４回生 織田 恵

12 【大学の仲間たち】

オオチャバネセセリ 自然環境教育センター長 前田喜四雄

表紙紹介

手作り絵本と絵巻物展

学生たちが企画、運営をする「手作り絵本展」を開いて、今回で10周年になります。

「初等教科教育法（図画工作）」の授業では、84名の学生が掌にのる『正倉院ミニ絵本』を作りました。まずは「キャンパスメンバーズ」制度を利用し、奈良国立博物館で行われた正倉院展を全員で鑑賞することから始めました。「教員になったら、子どもたちに古文化財の素晴らしさを伝えよう」という熱意が小さな絵本一つひとつにこめられ、内容も充実したものに仕上がりました。

また、「幼児の造形表現」の授業では、29名の学生が幼稚園実習で活用できる3種類の絵本をそれぞれ作りました。まず1つは、幼児でも簡単に作ることができるソフトカバーの絵本。2つ目は、物語と絵を自分で創作したハードカバーの絵本。3つ目は、飛び出す仕掛けの大きな絵本。いずれも手作りならではの趣のある作品ばかりで、ページをめくるたびに作り手の気持ちが伝わってくる素晴らしいものでした。

「基礎ゼミⅡ」の授業では、入学して半年経った1回生11名が奈良教育大学の特徴を描いた『キャンパスライフ』の絵本を作成しました。その他、地域の方々も賛助出品し、全部で250冊余りの手作り絵本を教育資料館に展示しました。

また、同館の壁面には、大学院生・学部学生が制作した自叙伝毛筆絵巻物と古典名品絵巻物の模写を展示。さらに、奈良教育大学の卒業生たちが中学校や小学校で指導した社会見学や修学旅行絵巻物など300点程を展示し、10周年に相応しい賑やかな催しになったと思います。

表紙題字　名誉教授　池田桂鳳

THE PRESIDENT COLUMN

地域連携、国際交流

柳澤　保徳
奈良教育大学 学長

国立大学法人奈良教育大学として3年目をむかえましたが、奈良にある教育大学として、特色ある取組みのいくつかを簡単にご紹介したいと思います。

本学の特色ある教育改革の取組みの一つに「新世代を先導する理数科教員養成プログラム」があります。このプログラムの一環として、県内の自然豊かな曽爾村の小学校と中学校を会場として「サマースクール2006イン曽爾」が開催されました。詳細は本号に紹介されていますので省きますが、私も4日間の日程の前半に参加し、両校の校長先生をはじめ、理科の先生方、さらに保護者の方々とも懇談の機会をもちました。参加した学生諸君の、最初は少しぎこちなかった子どもたちとの触れ合いもすぐに打ち解けたようで安心しました。子どもたちのための科学実験や各教室に別れての学習支援など、曽爾村の子どもたちとのまたとない交流の機会になりました。大学での準備ではうまくいったけれどその場では思うようにできなかった実験もありましたが、これらの経験を今後に生かすとともに、サマースクールが着実に継続されるよう願っています。

同村の教育委員会の方々ともお話する機会がありました。本学がまだ奈良学芸大学であったころに学生と共同で取り組んでいた〝へき地教育研究〟や当時ご活躍であった先生方のお名前が出てきて大変懐かしく思いました。本学では、昭和三十年代から五十年代にかけて〝へき地教育〟の組織的な研究を行なってきましたが、いまあらためて、理数科の教員養成とともに、地域の教育を支えるコミュニティーの役割を視野に入れた新しい形のへき地教育の手がかりを掴みつつあると思います。

さて、眼を海外に転じて、国際交流の取組みをご紹介します。

本学の中期目標では、「アジアを広域的な地域の一つとして視野に入れ、教育研究上の国際交流を広く推進する」こととしていますが、昨年締結した西安外国語大学（中国）との学術交流協定に基づく初めての共同事業として、10月上旬に「西安外国語大学との国際大学交流セミナー」を開催しました。

同大学東方語言文化学院副院長の馬先生をはじめ、日本語を専攻する学生の皆さんをお迎えして、「世界遺産を通した環境教育と文化理解教育」をテーマに、大学の内外で一週間に及ぶセミナーを成功裡に終了することができました。来日した学生の皆さんのフレンドリーな態度と自然な日本語には驚かされたのですが、最終日、ホームステイ先のご家族を交えての「さよならパーティー」では、終始名残が尽きませんでした。次年度以降の取り組みが期待できそうです。

これを契機に、世界遺産と伝統文化あふれる奈良の特色を生かした留学生教育プログラムをさらに育てて参りたいと思います。また、このような交換留学生の相互派遣による国際交流の促進とともに、今後はアジアの国々の教員養成教育をテーマとした教育研究交流も考えていく必要があると思っています。

教員養成GP　2年連続採択！「高大融合による理数科高校教員養成」

融合理数GP　プロジェクト代表　松山　豊樹

はじめに

平成18年7月20日に奈良県庁内文化記者クラブで、本学のプロジェクト「高大融合による理数科高校教員の養成」が文部科学省公募の「平成18年度資質の高い教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に採択されたことがプレス発表されました（略称：融合理数GP）。平成17年度には、プロジェクト「鍵的場面での対応力を備えた教員の養成」が教員養成GPに採択されており、本学のプロジェクトが2年連続で教員養成GPに採択されたことになります。平成18年度教員養成GPに採択されたのは全国で24件、うち国立大学は12件です。かなりの狭き門を突破したと言って良いでしょう。

これまでの歩み

実は、一足飛びに融合理数GPに辿り着いたわけではありません。「理数科離れ」を教員養成の現場から打破するために、平成16年度当初から学内では地道な準備が始まり、1年の準備期間を経て、プロジェクト「新世代を先導する理数科教員養成のための教育プログラムの開発」（略称：先導理数）が文部科学省の教育改革プロジェクトに採択されました。先導理数は、義務教育、すなわち小・中学校の教員養成を主としています。もちろん、小・中・高と続く積み上げの中での義務教育をしっかり意識するために、高校教育もその守備範囲に入って来ます。小学校で芽生えた理数への興味が、中学校で継続的に発展し、そして高校へ続く、その道のりを総体で考えない限り、学習意欲の低下がどこかで起きてしまいます。その見地をはっきり認識したとき、融合理数GPへの扉が開いて行きました。

連携から融合へ

融合理数GPは、真っ向から理数科高校教員の養成を目的とします。特に、教育実践力を向上させるため、地域の高校をフィールドとして、積極的に教育現場に出て行き、生徒の学びの場を実地に体験できるプログラムを用意しました。

具体的には、奈良市及び奈良県の教育委員会の支援の下、近隣公立高校2校（市立一条高校、県立北大和・奈良北高校）の教育現場をフィールドとして、高校教員とともに高校理数科教育の展開に有機的に融合した教育システムを構築することを目指します。

教育プロジェクトの全体は次のように構成されています。まず、連携高校との高大融合では、学部生の学力向上、高校への学部生の派遣、大学教員の高校への派遣を継続的に行い、高校から現職教員を招聘し、本学学部生の実践力を高める指導を進めます。

以上の学部教育でのプログラムに加え、新規事業として、市・県教育委員会と連携して理数科特別研修会を開催します。大学院生、高校非常勤教員を教育研究員として採用し、プロジェクトを支援する中で自らの力量向上を図ります。学内に、協力校に開かれたオープン・サイエンス・ラボを設立し、実験を中心とした高校理数科教育を支援し、また国内外の高校理数科教育の動向調査を行い、プロジェクトの一層の推進の糧とします。独自の電子ポートフォリオの開発によって一連の事業を学生と共に記録し、評価を日々の活動にフィードバックさせます。プロジェクトの最後には理数科教育シンポジウムを開催し、総括とします。

この教育プロジェクトの特色としては、①単発的な出前授業、大学訪問、公開講座等ではなく大学の教育プログラムと高校での授業展開を有機的に結合した取り組みであること、②大学生と高校生が主役となり、相互の学びの連結により学力の継続的な積上げが可能となる取り組みであること、③連携によって生み出した成果を、オープン・サイエンス・ラボの設置などで地域の公教育に還元することを視野に入れた取り組みであることです。

こうして、この奈良の地に、小・中学校教員養成の先導理数、高校教員養成の融合理数GPという小・中・高フルセットの理数科教員養成のシステムが誕生したのです。

現在の活動状況

融合理数GPの本格実施は、平成18年10月から開始されました。学内的には、10月18日に本学の理数系学部生に融合理数GPの説明会を実施しました。以降、高校への大学教員派遣授業を皮切りに、学部生の協力校への継続的派遣、学内での高校現職教員によるカリキュラム・教材開発指導、高校生と一緒に出かける学外見学研

大学の取り組み

修会等々、着々と教育プログラムは進行しています。

教育研究員制度も既にスタートし、理数科の高校非常勤教員1名、理数系大学院生2名が採用され、事業への支援活動を通した自己研鑽が積まれています。

オープン・サイエンス・ラボの設置に向けての準備も進められています。学内の一角を改装し、実験作業台の搬入から実験機材の納入が順次行われています。そして、教育研究員を中心に、機材の保守・管理、実験メニューの開発や実験用マニュアルが作成され、体制が整い次第、協力校へ開放されます。

独自の電子ポートフォリオの開発も既に着手されています。現在、試用版を実際のゼミナール形式の授業で運用させ、改良を加えて行っています。

2月には国内視察が、3月には国外視察が予定されており、国内外の取り組みを実際に見てくることは、今後に役立つものと思われます。

次年度へ向けて

今年度、10月からの開始でまだ半年の期間を経過した段階ですが、従来の教員養成のカリキュラムでは成しえなかった多くの取り組みにチャレンジしてきました。地域からの反響も少しずつですが出て来ていて、手ごたえを感じています。当初、2校の協力校でスタートしましたが、さらにもう1校参加することが決まりました。3校とも、それぞれに特色を出した事業が展開されて行くことになるでしょう。次年度も、予定されたプログラムを着実に積み重ねて行くことが重要です。継続が必ずや力となるでしょう。

最後に、この場を借りて、融合理数GPの立ち上げに惜しみない協力を頂き、また現在もその運用に積極的に参加下さっている本学教員有志、事務局各課の皆様、協力校の先生方、奈良市教育委員会、奈良県教育委員会に心から感謝致します。

奈良教育大学　融合理数 GP　学生説明会

北大和・奈良北高校サテライト
本学教員による高校での授業
（燃料電池について）

一条高校サテライト　授業実習の風景
（机間指導で生徒の質問に答えるＴＡ）

一条高校サテライト　授業実習後の反省会
（授業のねらいの解説と意見交換）

オープン・サイエンス・ラボでの
カリキュラム・教材開発の実践指導

電子ポートフォリオ開発のためのセミナールでの様子

神戸製鋼加古川製鉄所見学研修会（研修室での説明会）

神戸製鋼加古川製鉄所（工場見学、内部は撮影禁止）

神戸製鋼加古川製鉄所（工場見学後の質疑応答）

ニィハオからツァイチェンまで

―国際大学交流セミナーを終えて―

副学長（国際交流・地域連携担当）
淡野明彦

秋もたけなわとなってきた10月9日の夕刻、われわれ奈良教育大学のスタッフは関西国際空港の国際線北入国口で西安外国語大学の一行を迎えた。東方語言文化学院副院長の馬永平先生引率のもとに、教員2名と学生9名の一行であった。全員が日本語コースの所属であるために、日本語で挨拶を交わした。

用意した小型バスに乗り、奈良へ向かう。学生諸君はすべてが日本へは初めての訪問で、薄暮のなかにオレンジ色に浮かび上がる空港連絡橋に感動の声をあげている。阪神高速道路湾岸線に入ると、左右に世界都市大阪の夜景が展開する。朝早くの出発であったために一行はやや疲れ気味にみえたが、それでも車窓の景観に釘付けになっていた。内陸部にある西安ではめったに見ることのできない景色であり、一行の感動ぶりは相当なものだっただろう。

西名阪自動車道に入ると、あたりには建物が少なくなり、しだいに車窓は暗くなっていった。オーバーな表現だが、現代から過去へとタイムスリップしていくような気分を感じた。疲れが極に達したのか、車内には寝息がじょじょに漂ってくる。最初に伝えておくべき話も終えたので、こちらも一息である。西安の一行には長く感動の一日であっただろう。

奈良教育大学と西安外国語大学（旧称は西安外国語学院）との学術協定による正式な交流は2005年6月からスタートしたが、それまでに基礎的なベースは築かれていた。すでに定年を迎えて退職された国文学の真鍋先生、漢文学の川北先生の研究室が主となって、お二人の先生が西安に講義に赴かれ、また西安からの留学生を迎えてきていた。奈良で学んだ留学生が母校の教壇に立たれ、また西安の国家行政機関の職に付かれるという、着実な成果があがっていた。この成果をどのように発展させるかが、本学の国際交流面での大きな課題であった。

2004年4月から全国の国立大学は「国立大学法人」という聞きなれない冠言葉をかぶせた組織となった。国が財政的な面で関与する仕組みは維持しつつも、経営の具体面では各大学の独自性をもたせ、教育・研究の一層の充実と発展を目指そうとする意図をもった政策であった。この方針に基づいたおおむね6年間の「中期目標・計画」が作成された。その中で、重点的に取り組む内容の一つに「アジアを広域的な地域の一つとして視野に入れ、教育研究上の国際交流を広く推進する。」を項目としてうたった。アジアの大学では韓国のヨンナン大学と協定に基づく交流を久しくおこなってきたが、アジアの大国である中国との間では正式な交流は一校もなかった。そこでこの機会に西安との交流を正式なものとする判断に舵取りをした。

西安は中国を代表する古都であり、奈良に築かれた平城京はその西安の都城計画にならったといわれている。また、シルクロードの重要拠点として日本につながり、さらには共にユネスコの「世界文化遺産」に登録されている物件を有している

奈良市長表敬訪問

という類似性がある。大学の重点的な課題に、世界遺産を個性ある教育研究、学際的研究に活かしていこうとする一項もあり、まさに西安は恰好の相手方であった。検討の過程で「師範大学」との交流の提案もあったが、機運が熟するには今しばらくの状況であり、今後の取り組みとした。

どのように西安との具体的交流のスタートを図ろうかと思案していたときに、折りしも独立行政法人日本学生支援機構とみずほ国際交流奨学財団から「国際大学交流セミナー事業」の募集があった。この事業は外国の大学生を日本に招いて、日本の大学生との間で共通のテーマを設定して議論や見学を行おうとする企画である。本学と西安とが共に有する世界遺産を取り上げ、「世

大学の取り組み

界遺産を通した環境教育と文化理解教育に関する日中セミナー」と題して応募した結果、みずほ国際交流奨学財団により事業採択がなされた。

いよいよ5日間におよぶセミナーの開始である。開講式には一夜にしてすっかりと疲れがとれた学生諸君の生き生きした姿があった。取り立てて紹介をしなければ、日本人学生と何ら区別がつかないファッションで、「ケータイ」も「デジカメ」も手にしていた。一行の接遇にあたっては生活スタイルの違いが気にかかっていたが、中国内陸部とはいえ西安という巨大都市の生活はかなり国際スタンダード化が進んでいるらしく、安堵した面が多かった。世界文化遺産「古都奈良の文化財」の東大寺、春日大社、興福寺など、同じく「法隆寺地域の仏教建造物群」の見学、奈良県庁での県内の文化財に関する講義、西安市と姉妹都市関係にある奈良市の市長訪問、本学学生との世界遺産の保全・保護に関する討論など時間刻みの盛りたくさんのメニュであったが、一行は飽きることもなく興味津々で臨んでくれた。特筆すべきことは3泊4日のホームステイで、離日前夜のお別れパーティーではまるで親子や兄弟、そして孫のように、涙顔でお互いに抱き合って別れを惜しんでいたことである。ホストファミリーの方に渾身の歓待をいただいた結果であり、感謝にたえない。

セミナーはささやかな規模ではあったが、日中交流という面での期待した成果を得ることができた。今後、このセミナーを機に大学間の交流事業をより具体化させ、人的交流を推進したい。

日程表

10/10	奈良教育大学長表敬訪問 馬永平副院長、張芸文主任、他学生９名 開講式 基調講演：「アジアの世界遺産と環境」 上野邦一氏：(財)ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所事業委員会委員 奈良女子大学生活環境学部生活文化学科教授 学内案内：吉備塚説明： 金原正明：奈良教育大学助教授、 山岸公基：奈良教育大学助教授 講演：「奈良の世界遺産と環境」 淡野明彦：奈良教育大学副学長、教授 歓迎パーティー
10/11	講演：「奈良県勢の概要について」 中山悟氏：奈良県企画部観光交流局文化国際課長 講演：「平城遷都1300年記念事業について」 廣野隆信氏：平城遷都1300年記念事業推進局次長 施設見学：奈良県庁内(県庁屋上から奈良の世界遺産遠望) 実地見学：古都奈良の文化財：興福寺～東大寺～春日大社を巡る
10/12	講演：「奈良の文化遺産～仏像と伽藍の変化を中心として」 田渕五十生：奈良教育大学教授 授業体験：「奈良の伝統文化～能を中心として」 田渕五十生：奈良教育大学教授 奈良の伝統：「芸能の鑑賞」　金春穂高氏：金春流シテ方
10/13	講演：「ACCU奈良事務所の役割と事業の概要について」 太郎田明憲氏：ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所次長 施設見学：「ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所」 商工観光館：奈良の伝統・工芸の見学 奈良市長表敬訪問 講演：「西安市と西安の世界遺産」 西安外国語大学学生による紹介 ホストファミリー対面 (ホームスティ～15日：2泊3日)
10/14	奈良の伝統産業に触れる　麺ゆう館～けいはんな学研都市～高山茶筅(ちゃせん)の里
10/15	ホームスティ先での交流
10/16	実地見学：奈良の世界遺産と最先端技術 平城宮跡 ～ 唐招提寺 ～ 薬師寺 ～ 法隆寺 ～ シャープ天理工場 秋季留学生懇談会(歓迎会)への参加
10/17	講演：「奈良教育大学の文化財の研究について」 長友恒人：奈良教育大学副学長、教授 大山明彦：奈良教育大学助教授 全体討議 西安外国語大学学生による体験発表 閉講式 さよならパーティー

体験発表する王　歓さん

開講式後の記念撮影

本学学生の体験発表に対する質問

シャープ天理工場見学

日本語の多様性と普遍性の探求

国語教育講座・助教授
前田　広幸

■研究紹介

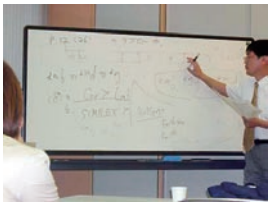
私の専門は日本語文法、音韻論です。特に近年は、文法と音声のインターフェース領域に興味をもっています。

もとは敬語、否定、とりたて等、文法分野を中心に論文を書いていました。ところがATRという共同研究機関で当時、自動翻訳電話と呼ばれていた技術の研究を行なう中で音声研究者と交流する機会があったことや、イギリス・エセックス大学での在外研究中に音韻論者I・ロカ氏と出会ったことなどをきっかけに、音声・音韻分野への関心が高まり現在に至っています。

ここ数年の間に成果をまとめたいと考え、現在おもに取り組んでいるのは、平曲譜本（琵琶を弾きながら平家物語をかたる語り方を符号により注記した文献）中の譜記から古い日本語のアクセントやイントネーションを再構する試み（金田一春彦や奥村三雄らによるすぐれた先行研究がある）を、現在の音声研究の知見を生かすことにより、さらに発展させようとする研究です。

■共同研究の近況

現在、分担者・協力者として参加している共同研究としては、「日本語史の理論的・実証的基盤の再構築」および「日本語の対人配慮表現の多様性」をテーマにしたものがあります。前者は今年度が最終年度で、その成果を4巻のシリーズ本としてまとめるべく現在、分担執筆・編集者の一人として、取り組み中です。また後者は昨年度スタートした共同研究（平成二十年度まで）で、ちょうど研究も佳境にさしかかり毎年2回ずつ開いている合宿での議論もますます熱をおびてきています。



共同研究者との討議の様子

■研究室の近況

今年の春、学部生一人、院生二人（一人は奈良県の小学校教員、二人は進学の道を選びました）を送り出し、現在の研究室は、私以外に、学部生一人、院生二人、研究生二人からなる、こじんまりとした構成です。日本語の多様性と普遍性に興味のある方は気軽に一度遊びにきてみてください。

立場は変わっても

数学教育講座 教授
吉田　明史

■私の背景

高等学校教員を17年、行政を14年（県及び国の合計）担当し、本年度、奈良県教育委員会事務局学校教育課から着任しました。

専門は数学教育です。文部科学省での五年間は、数学教育の価値を訴え続け、「創造性の基礎を培う数学教育」を旗印に、現在の中学校と高等学校数学の学習指導要領の改訂に携りました。また、各学校の数学の先生や全国の教科担当指導主事の先生方には、「教えるほど算数・数学嫌いにさせている現状は、指導者の責任として厳しく受け止め、数学教育の陶冶的側面もしっかり見据え、数学学習の大切さを認識できるよう指導してほしい」と訴えていました。この人間形成の視点から見た数学教育の在り方については、今も機会あるごとに話しているところです。

授業風景

■大学での私の仕事

本学では、数学科の教員養成にかかわる授業（中等教科教育法、数学教育講究、数学教育論）を担当したり、教員養成の在り方を考えたりすることとなりました。授業では、算数・数学を教えることが楽しいという経験を積んでほしいと思っています。また、問題を解くことだけに夢中だった自分を見直し、教えるという視点から数学を学んでほしいと思っています。さらに、教職に就いて情意面の改善と数学的思考力・表現力の向上を意図して、コンピュータ等を活用した算数・数学の授業が展開できるようになってほしいと願っています。一方、本学が目指している教職大学院大学のカリキュラム編成等にもかかわり、教科を超えて、期待される教師像は何かを考えるいい機会になっています。

大きな変革の時期に勤務し、立場は変わっても、目指す方向性が同じことに充実感を味わっている日々です。

健やかな食生活を送っていますか？

生活科学教育講座・教授
大家千恵子

■教育について

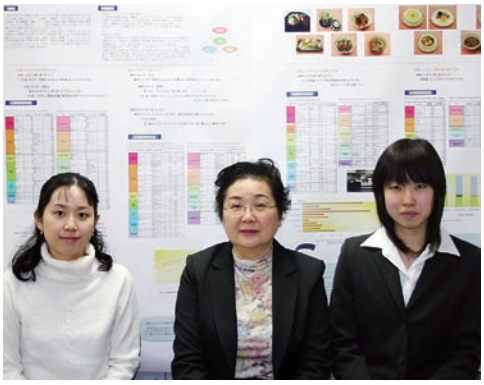
近年、食生活を取り巻く社会環境の変化などに伴い、偏った栄養摂取などの食生活の乱れ、肥満や痩身などが見られており、増大しつつある生活習慣病と食生活の関係も指摘されている。また、食の安全、食の海外依存、伝統的な食文化の喪失も問題視されている。このような背景の下で、平成17年6月に「食育基本法」が制定されました。

教育の三本柱である「知育」、「徳育」、「体育」に加え、「技育」の四本柱の基礎として「食育」が位置づけられなければならないと考えています。「食育」とは、様々な経験を通して「食」に関する知識と「食」を選択する力量を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てることであると思います。そのために食育の手法を開発するには「食科学の推進」が重要であり、それを教育現場に活かすことを目標にしています。

■研究について

20世紀は大量消費、大量廃棄の時代と言われ、消費することが美徳とまで言われてきました。しかし、21世紀に入り地球の資源が枯渇し、さらに温暖化が大きな問題になっています。私達人間の生きるもとになる「食」も環境問題を避けては通れません。これからはこの地球の限界を定量的に把握し、人間活動と調和させ、かつ整合性を高めつつ持続可能な発展を目指す時代です。それゆえ、日常の生活活動も環境に与える負荷を少なくすることが求められています。市民レベルのライフスタイルの見直しが必要となっています。

私の研究は食生活の中で、地球温暖化の原因の一つであるCO_2排出を減らす献立の工夫、提案をしています。具体的に献立における食材の生産、輸送、調理、廃棄のライフサイクル全体のCO_2排出量について定量し、その削減のための提案を考えています。



ゼミ学生と研究室で

学校における豊かな人間関係の構築を求めて

教育実践総合センター・助教授
池島　徳大

■研究室の状況

池島研究室には、学部生（3名）と院生（4名）の計7名が所属しています。院生の中には、現職教員（昼・夜間）と教員経験者が3名在籍しています。

■研究テーマ

私は、もともと公立学校の教員からスタートし、その後、県と国の教育研究機関を経験し、本学へ転任してきました。

私は、日本の学校教師に必要なスキルとして、次の3つのスキルの獲得を提案しています。「友だちづくり（Be friending）スキル」。「傾聴（Active listening）スキル」。「対立解消（Conflict resolution）スキル」の三つです。このうち、現在最も関心のあるテーマは、「フィールドベースの対立解消プログラムの構築」です。日常的に起こる子ども同士のもめごとやいじめなどの対立問題に対して、当事者同士が〝Win-Win（勝ち―勝ち）〟法で問題解決を図っていくスキルの開発を目指しています。

■問題解決能力がますます求められる日本の教師

学校現場では、子どもの対人関係能力の未熟さから、ちょっとしたことでもめたりキレたりするなどのトラブルが少なくありません。いじめや不登校の要因にもなり得ます。そこでメディエーター（調停役）である先生の登場となるわけですが、その助け船が効を奏せず先生と当事者あるいは保護者との問題にすり替わってしまうことも珍しくありません。対立問題に対して、当事者双方が納得した上で解決できる方法を学んでおくことは、教員養成において極めて重要なスキルです。なお、関連して、子どもたちが自分たちで問題を解決したり助けあったりしていく相互扶助システムとしての「ピアサポート・プログラム」の学校教育への導入も検討しています。

研究室で学生と

「人（ひと）」の「事（こと）」を思う仕事に就いて

ナカバヤシ株式会社・人事部
石田　智也

「会社を見る」側から「学生を見る」側へ

4月末に入社して初めて携わった当社の会社説明会。昨年までは就職活動をして「会社を見る」立場であった私が、一年後には「学生を見る」立場になっているなんて、本当に不思議な気がします。新人なのでまだ一人で面接を行ったりはしませんが、説明会などで質問を受けた時には、「昨年までは学生だった」という立場を生かして、学生に近い目線で質問に答えるようにしています。

「採用」だけではない人事の仕事

学生にとって「人事の業務」として一番に思い浮かぶのは「採用活動」でしょう。私も採用という仕事がしたくて人事部を志望しましたが、もちろん採用だけを行っている訳ではありません。給与計算などの労務関係の業務や教育研修、福利厚生など意外とたくさんあります。私は採用活動以外に、住民税業務と福利厚生業務の一部も担当しています。業務の中には一カ月や半年、一年といった周期で行う必要のある業務も多いので、入社して半年以上が経っていますが、日々勉強の毎日が続いています。

職場にて

「社員の為に働いている」という感覚

営業の社員は「売上」をあげて会社に貢献することが求められますが、人事をはじめとする管理部門は「社員がその能力を十分に発揮できる環境を作る」ことが求められます。入社前からそういった考えは理解していたつもりでしたが、実際に様々な人事の業務を行い、多くの社員と接していく中で、「会社で働くすべての社員の為に働いている」という感覚をより強く感じるようになりました。採用活動も「将来一緒に働くであろう人（学生）のために働いている」と私は考えています。

何かと忙しく充実した毎日を過ごしていますが、その中で一緒に働くみんなの為に、日々努力していきたいと思います。

ひと・あれ・これ

子どもと同じ目線で向き合って

十津川村立平谷小学校・教諭
山本　菜採

がむしゃらに走ってきたこの一年

今年4月、学生から突然教師になった。心の準備は少しはしていたけれど、右も左も分からず、その責任の重さに心が潰されそうになってしまったこともあった。

十津川村の学校では、一クラスの人数が少ない。私は9名の児童を受け持っている。少人数なので、算数など力の差が大きく出てしまう教科でもきめ細やかな指導をすることができる。できる子にはより発展的な課題、苦手な子でも自信がつくようできた所までででも認められるような課題づくりに日々取り組んでいる。「算数なんか」という言葉が聞こえなくなったことが私の今の成果かなと思う。しかし、人数が少ない分、苦手、得意というレッテルを剥がしにくい。周りの子からの評判が「できた」という気持ちを損ねてしまうこともある。

一学年、一クラスということにしんどさを感じることもある。教材作りも教材研究も、すべて一人だからだ。でも、一人で作り出し考える力は、この一年でかなりついたように感じる。人一倍時間はかかるし、しんどいけれど子どもと「わかって楽しい」時間を持てることが人一倍うれしい。私なりのペースで、私なりにていねいに一歩ずつ歩んでいきたい。

何でも子どもと一緒に

9人なので、タンスでのゲームや遊びはいつも一緒にする。子どもと同じ目線で、一生懸命できる教師でありたい。また、子どもたちの方が知っていることもまだまだ多い。時には子どもたちに教わりながら、一緒に学びながら日々を過ごしている。それが今のスタイルかな。

みんなで生き物カルタ

学生企画活動支援事業

第2回 京終ビバ開催！

京終ビバ代表 総合教育課程環境教育コース4回生
織田 恵

2006年10月21日土曜日、JR桜井線京終駅で駅の活性化を目的としたイベントである「第二回京終ビバ」を行いました。

準備では4カ月前から企画を練り始めました。去年人気のあった、もちつき、電車クラフトづくり、フリーマーケットなどを核としてイベントの出し物を組み立て、地域環境コースの仲間達でまず話しあった後、去年もお世話になった済美子供会の方々とも何度も話し合いを重ねました。また、京終駅の使用許可もJRに申請しに行きました。

大筋が固まると、学生支援事業に申請しました。この頃になって初めて、子供会、学校、JRの他にも、イベントを行うにあたっては地域の人々の理解を得ることが必要不可欠だということがわかってきました。多くの協力に支えられながら、夏休み中に登校したり、遅くまで学校に残ったりして出し物の準備をしつつ、PR活動や地元への呼び掛け、会場の下見など学外にも駆け回りました。

イベント当日はよく晴れ、私達スタッフは自分達で作ったビバのためのポロシャツに身を包み、緊張と期待に胸を膨らませてイベントをスタートしました。会場は一日を通して親子や友達同士で参加してくださる人々で賑わっていました。準備の時の苦労が吹き飛ぶほど、スタッフみんなが子供達と一緒に遊んでいました。あっという間に一日が終わり、事故も怪我もなく無事に終われた事でほっとしました。気付いてみれば総勢80名弱の方々の協力をいただいており、嬉しい喜びでした。参加してくれたお客さんからも「楽しかった」「毎年来たい」と言っていただき、大きな達成感と感謝の気持ちで一杯です。

後日、反省会を開き、来年はより一層地域や学内で協力を呼び掛け、そのつながりを利用してより深みのあるイベントにしていこう、と話し合いました。今回は駅に賑わいを取り戻そうという主旨のもとでどのくらい効果をあげられたかは分かりませんが、継続していく事で意味を強めていけると考えています。〝地域の中の大学〟という今まで意識できていなかった関わりを強く感じることができました。ご協力いただいた方々にはこの場を借りてお礼を申し上げます。

大学の仲間たち

和名	オオチャバネセセリ
学名	*Polytremis pellucida*
分類	セセリチョウ科
翅開長	38mm前後

オオチャバネセセリ

羽の形が尖っており，優雅なチョウのイメージからはかけ離れている「オオチャバネセセリ」。スマートなはずの胴体もやや太いなどが誤解を招くという具合に、その見かけから多くの人から「ガ」の仲間と思われているが、実は「チョウ」の仲間。セセリチョウ科の紹介第二弾である。

前回のイチモンジセセリと大きさも色合いもそっくりであるが、後翅にある4あるいは5個の白い斑紋が前種のように直線上に並ばないことで区別できる。幼虫はイネ、エノコログサ、ススキ、ササやタケなどのイネ科やタケ科といった身近にある植物を食べるので本学内でも繁殖していると思われるが、私はこれまで確認していない。年2回発生しているようで，本学では初夏と秋の2回、チョウの姿が見られる。

ちなみに越冬は幼虫で行うと述べられているが、こちらも私はまだ観察をしたことがない。なお、セセリという名称はどうやら「せせる」に由来するようで、飛び方が「ちょこまか」せわしなく飛翔することに因るのではと勝手に想像している。もし、名前の由来が書いてある本なり事典があればお教え願いたい。

（自然環境教育センター長　前田喜四雄）

URL http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm

奈良教育大学　広報誌
第23号　平成19年1月31日　編集／広報・情報公開委員会　発行／国立大学法人奈良教育大学
〒630-8528 奈良市高畑町　TEL. 0742-27-9105　FAX. 0742-27-9141
http://www.nara-edu.ac.jp　kouhou@nara-edu.ac.jp